

創刊号に続き、今号でも多くの方々からご協力・ご支援をいただいた。三上晴子さんの展覧会についてグラビア・レポートを寄せて下さった四方幸子さん、特集に寄稿して下さった水嶋一憲さん、リビット水田暁さん（並びに、翻訳の大崎晴美さん）、川口潤さん、生方智子さん、また（今回は残念ながら論稿を採用できなかった方々も含めて）名古屋大学の内外から投稿して下さった皆さん、さらには査読委員を快く引き受けて下さった皆さんに心よりの謝意を表したい。とりわけ、査読委員は完全に匿名であり無償なので、引き受けて下さる方を探すのにいつも苦勞するのだが、それだけに所属機関の枠を超えて快諾していただいた方々には感謝と敬意の念に絶えない。

『JunCture』がある特定の大学のある特定の部局から刊行されている事実は、私が個人的にある種の後ろめたさを感じているところである。近年、国からの資金の獲得をめぐる大学間・部局間の競争があおられるなかで、さまざまなプロジェクトが所属機関単位で行われる傾向が強くなってきた。教員は、予算を獲得するために国から与えられた枠組みに合わせて自らの所属機関や自身の研究・教育を正当化することに傾注し、そのために多忙を極める状況が生まれている。『JunCture』もまたこうした構造の中で生み出されたものであることは否めない。そんな風潮の中では、他の機関に所属している人たちから協力を得ることは、なんらかの利害関係が一致するか報酬を渡すかしない限り気が引ける感じがしてしまう。

とはいえ、もし本誌の刊行元である日本近現代文化研究センターをあくまで資金提供者・学術的議論の支援者と位置づけ、その理解のもとで「外部」の人たちに様々な形で数多く参加してもらえれば、状況は多少なりとも変わってくるのではないかという希望的観測もある。センターは名古屋大学または本学文学研究科のためだけのものではなく、すべての研究者に開かれたものであるという了解が得られれば幸いである。その意味でも、今回所属機関の垣根を越えてご協力いただいた方々はとても心強く思えた。こうした思いはまた、今回の特集の意図とも共鳴することは言うまでもない。

最後になったが、前回に引き続き本誌を洗練されたデザインに仕上げて下さった金武智子さん、編集作業のアシスタントをして下さった大竹瑞穂さん、英語のチェックをして下さったコブス・ヴァン・スタデンさんにもお礼を申し上げたい。（藤本秀朗）